

学校法人自由学園の植林活動



海山植林地～植林・育林・材の利用～

創立者の文章から

「誕生林」1934年（昭和9年）-抜粋-（羽仁吉一著『雑司ヶ谷短信』より）

人を育てるのは木を植えるようなものだ。…松や杉がよく育つように、南澤の天地で、より大切な人間の魂がより見事に育って行けかしと祈る。

「男子部の夢」1935年（昭和10年）-抜粋-（羽仁吉一著『雑司ヶ谷短信』より）

南澤も男子部の将来を考えると、狭くなってしまった。…どこかの山の中に50町歩か100町歩位の場所を物色して、そこに山小屋を建てて、一組ずつ交代で1と月位生徒を送る。山での勉強は労働と研究と静思だ。労働は主として植林をやる。専門家指導の下に科学的にやる。自分たちで労働するばかりでなく、林業の管理や経営もやらせる。それはやがて学園の自給自足を助ける有力な産業の一つともなろう。場所によっては自家水力発電所も作りたい。溪流があるなら、山女魚のようなものの養殖もよからう。そこに自然科学や経済学の活きた勉強がある。それにもまして深山大沢そのものから受ける自然の感化に、更に多くの期待をかけたい。夜は炉辺にまといして、静かに聖書を読み、また祈ることを学ぼう。

「報徳記と少年たち」1942年（昭和17年）-抜粋-（羽仁吉一著『雑司ヶ谷短信』より）

このごろ朝の読書の時間に「報徳記」を読んでいる。二宮学の特徴は、自由学園の生活教育の行き方と、一脈相通ずるものがあって、特に少年たちを喜ばせた。「鋸の目をよく立つれば天下に伐れざる木なく、鎌の刃をよく研げば天下に刈れざる草なし、故に鋸の目をよく立つれば、天下の木は伐れたると一般、鎌の刃をよく研げば、天下の草は刈れたるに同じ」（二宮翁夜話）

自由学園の植林活動の歩み

- 1950年 男子部高等科 ①名栗（埼玉県飯能市）で植林活動開始
- 1966年 最高学部（大学部）②海山（三重県紀北町）で植林活動開始
- 1983年 男子部高等科 ③黒羽（栃木県大田原市）で植林活動開始
- 1985年 自由学園が第3回朝日文化賞森づくり部門奨励賞を受賞
- 1990年 最高学部 ④ネパールにて植林活動開始
- 1999年 最高学部新体制発足に伴い 女子学生がネパールワークキャンプに初参加
- 2015年 最高学部 海山での活動を終了し ⑤新名栗フィールドでの植林活動開始
ネパールワークキャンプが第31回東京キワニスクラブ青少年教育賞を受賞

1. 名栗での植林活動

場所 埼玉県入間郡名栗村（現飯能市） **面積** 10ヘクタール **主な樹種** スギ、ヒノキ

名栗植林地は西川材で有名な林業地の一角で、正丸峠のすぐ北側500メートルのところにあります。名栗村の北端で東は吾野村、北は秩父郡横瀬村と接しています。

1935年男子部設立後すぐに羽仁吉一先生は、生徒に山での生活をさせ、労働として植林をさせたいと『雑司ヶ谷短信』に書いています。羽仁吉一先生は「深山大澤龍蛇を生ず」という中国のことわざをあげて、山での生活を通して肉体的にも精神的にもたくましい青年を育てたいと願いました。しかし、この夢が実現するまで太平洋戦争を挟んで13年かかりました。1949年宮嶋真一郎先生（男子部1回生）が中心になり、数カ所の候補地の中から地理的人為的に条件の良い所として名栗村村有地を借用することが決まりました。そして1950年名栗村に生徒の手で9坪の山小屋が建てられ、自由学園創立30周年を記念して名栗の村有林を分収林（造林者と土地所有者が異なり、両者が造林による収益を分け合う契約をした山林のこと）として借りて植林活動を開始しました。



間伐材を道路際まで運び出し積み上げる

初年度は高等科3年生（男子部11回生）が2週間をかけて8ヘクタールにスギ苗2万本ヒノキ苗4千本を植え付けました。羽仁吉一先生は植林に向かう生徒たちに「君たちが48歳になった時このスギの木を使って新しい校舎を造るのだ。心をこめて行ってきなさい」と言われました。1953年名栗村との間で30年間の分収契約書が取り交わされました（その後1992年に伐採時ま

で延長)。管理期に入ってから毎年高等科生徒が数週間山小屋に寝泊まりし、ドラム缶風呂に入り、夜はランプの下で生活をしながら作業を行いました。1954年から下草刈り、1964年から枝打ち、1967年から間伐をそれぞれ開始し、優れた環境の森をめざして作業が継続され、1968年には間伐材が男子部の旗竿に使われるまでに成長しました。



間伐材を協力して運ぶ

2001年に「名栗植林50周年の集い」が卒業生・保護者60名が参加して植林地で行われました。50年前にこの植林地を生徒と一緒に開いた宮嶋真一郎先生は記念礼拝で「植える人間の生きている間の利益のために植林をする人はいません。次に来たるべき時代のためと思いますから。割り箸より少し太いくらいの細さで長さが40センチぐらいの苗木で植えた木が、抱えるとやっと手の先がくっつくくらいの太さに育っていくこの力は、人間の力ではありません。讚美歌で歌った『神の力をほめたたえよ』であって、天然自然が生きていくこの力を科学は作り出すことができない。目



薪を使って夕食を自炊する

に見えない力だからです」と話されました。そして2004年に創立80周年記念事業として完成した最高学部棟1階食堂の床材として名栗のヒノキ材が使われました。今でも生徒が泊まる小屋には電気・水道はありません。作業は間伐、切った木を集積所まで運ぶ仕事、また間伐した材を土留めや橋として使いながら林内に道をつける仕事をしています。現在の平均胸高直径（地上1.2メートルの太さ）は約30センチメートル、平均樹高は約23メートル、林内の平均立木密度は約1000本／ヘクタールまでになりました（2017年10月計測）。

2. 海山での植林活動

場所 三重県北牟婁郡海山町（現紀北町） **面積** 15ヘクタール **主な樹種** ヒノキ

海山植林地はヒノキで有名な海山材を産する海山町（尾鷲市の東隣）の海岸線を走る国道から往吉川沿いの林道を約5キロメートル北に入った所にあります。大台が原の麓に位置し、急峻で雨量の多いところです。

1966年に東京大学林木育種の権威者猪熊泰三教授（当時男子最高学部保護者）のご指導と林業家の速水勉氏（当時女子部保護者・海山町森林組合長）のご尽力により、最高学部学生のための植林活動を始めるために海山町と50年契約で借用の分収林契約を結び植林活動を開始しまし

た。翌 1967 年に速水林業から材木の提供を受け、学生の手で活動拠点となる山小屋が建てられました。冬休みに地ごしらえ、春休みに植え付け、夏休みに下草刈りを行い、1975 年にはヒノキの苗約 8 万本の植え付けが完了し、以後管理期に入ることになりました。1971 年には最高学部学生の卒業研究で小屋の近くを流れる川の落差を利用した小水力発電所ができました。1972 年に宮嶋真一郎先生が退職した後、1981 年より男子部の植林を含めてすべての植林・育林活動の責任を山本幸右先生（男子部 35 回生）が持つようになり現在に至っています。

1981 年には枝打ち、1986 年から間伐が始まりました。その後も春・夏・冬の長期休みを使って最高学部学生によって管理が続けられました。

<用語説明>

地ごしらえ: 鉋で低木を切り鎌で雑草を刈って苗木を植えられるように更地にする。高低差が一定間隔になるように等高線に沿って立木を残し、その間の地面にある切った低木や刈った雑草を 2 メートルほどの棒を使って上から下に捲るように落とす。切った低木や刈った雑草を立木の根元に棚（ボサ棚）に積み上げる。

植え付け: 根の側を袋に入れた苗木を背負子（しょいこ）にくくりつけて、鍬とバケツを持って植え付ける場所に登る。約 1.2 メートルの間隔で苗木を植えていくが、所によっては岩だらけでそのままでは植えられないことがある。そのような場合には、他の所から土をバケツで運んで窪みに入れて（客土をして）、そこに苗木を植える。

下草刈り: 植え付けた木が雑草やツルに負けないようにこれらを刈り払う作業で、植え付けてから 5 年程度までは毎年行う。鎌と砥石を持ち、鉋を腰につけて山に登る。草は鎌で、低木は鉋で切っていく。鎌の切れ具合が悪くなると、斜面に腰を下ろして砥石で研ぐ。

枝打ち: 節の無い良質材の生産を主目的として、ある高さまで枝をその付け根付近から鋸で除去する作業のこと。3.5 寸角（105 ミリ角）10 尺（3 メートル）の四方無節の柱を目指して、3 メートルの一本梯子を木に立てかけて登り、斜面の高い方の地上から 4 メートルまでの枝を切る。枝を切るときは、枝の付け根の幹ぎりぎりのところを切るようにする。

間伐: 混みすぎた森林を適正な密度にし、健全な森林に導くために、また利用できる大きさに達した立木を徐々に収穫するために行う間引き作業のこと。



学生の手で建てられた山小屋



ロープを使って丸太を沢沿いに下ろす

50年近くを経過する中で最初に植え付けたところの樹木の胸高直径が20センチメートルを越えるまでに成長し、植え付けた時の平均立木密度6000本/ヘクタールが間伐によって6分の1の1000本/ヘクタールまでになりました。しかしここまで成長した木と急斜面の作業環境を考えたときに最高学部学生による作業には危険度が極めて高いとの判断から、学園は2016～2025年に期限の到来する紀北町との契約を更新しないことを決めました。しかし紀北町のご配慮により学園が教育を行う上で必要な場合には、植林地の材を利用できるようになりました。これにより2017年11月に完成した「自由学園みらいかん」は海山と名栗で学生が50～60年かけて育てた高い品質の木材を使用して建築されました。



2017年11月に完成した「みらいかん」

3. 黒羽での植林活動

場所 栃木県那須郡黒羽町（現大田原市） **面積** 12ヘクタール **主な樹種** スギ・ヒノキ

黒羽植林地は八溝山地の北部にあり地味が肥えていて林業が盛んな地域にあります。黒羽町の中心から車で約30分、雲巖寺を過ぎて約10キロメートル奥へ入ったところにあります。

創立60周年を終えた1982年、自由学園那須農場の大塚甫先生（男子部2回生）の尽力と大田原営林署のご助力により黒羽の国有林を部分林（国有林野に契約によって国以外の者が造林し、その収益を国と造林者が分けあう林地のこと）として借りる契約を結びました。自由学園の第三の植林地を黒羽に決定するためには、那須農場を根拠地にして作業ができることが大きな要素になりました。黒羽の植林地は上南方、堰の入、田中の3カ所に分かれていて、それぞれが約4ヘクタールの面積があります。1983年から2年間に上南方、1985年から2年間は堰の入、さらに1989年からの3年間に田中に、1ヘクタール当たり4500本の割合で、スギ・ヒノキの苗木を植え付けました。1992年からは育林期間に入り、小さかった苗木もその後、高さ3メートルの一本梯子で枝打ちをするまでに成長しました。



一本梯子に登って枝打ちをする

しかし、2011年3月の東日本大震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所の事故によって、植林地が放射線で汚染されたために、それ以降植林活動は停止して現在に至っています。

4. ネパールでの植林活動（現ネパールワークキャンプ）

場所 ネパール カブレ地区 **主な樹種** マツ・自生の広葉樹・果樹・花木・薬用樹種等

1980年代後半になって、自由学園第3代学園長の羽仁翹先生が「最高学部の学生が日頃培った力を活かし、海外でも社会をよくする働きができる」との考えを示され、1989年、現地ネパールの公益社団法人アジア協会アジア友の会のサポートを受けながら植林作業が行えるネパールが活動地域として選ばれました。そして1990年にネパール政府と現地自治体また全国友の会の協力を得て「ネパール植林」が始まりました。無秩序な伐採によって荒れた山地に苗木を植林するプロジェクトです。

第1回から現地の小学生たちに美術や体操、理科、音楽などを教える活動も継続して行われていたため、第8回(1997年)よりそれまで「ネパール植林」と呼ばれていた活動を「ネパールワークキャンプ」と改めました。また1999年に男子最高学部(4年制大学部)と女子最高学部(2年制大学部)を改組し男女共学の新しい最高学部がスタートしたことに伴い、第10回からは女子学生も参加するようになりました。そして最初の頃に植林をした地域は25年以上を経過した今、森になっています。

第1回 (1990年) カブレ地区デュリケルで地区営林署 (District Forest Office 以下DFO) の施設を拠点に、カブレの丘と呼ばれる場所から植林活動を開始。

第2回～第4回 (1991年～1993年) 毎年活動場所が変わり継続的な活動が困難だった。

第5回～第9回 (1994年～1998年) DFO、地域住民で構成される森林管理グループ、自由学園の3者によるカブレ地区デュリケルでの第1回5カ年計画。主要活動地域は①ドビコーラ。サンジワニ学校との交流開始。首都カトマンズから北西約350キロにあるジョムソンでミツマタ植林を通しての自立支援プロジェクトも行われた。

第10回～第14回 (1999年～2003年) 第2回5カ年計画の主要拠点は②ジャレスワール。



現地の子どもたちと植林をする



植林6年後2010年のバカテダラ



2017年第28回植林活動

第15回～第19回（2004年～2008年）第3回5カ年計画の主要拠点は③バカテダラ。

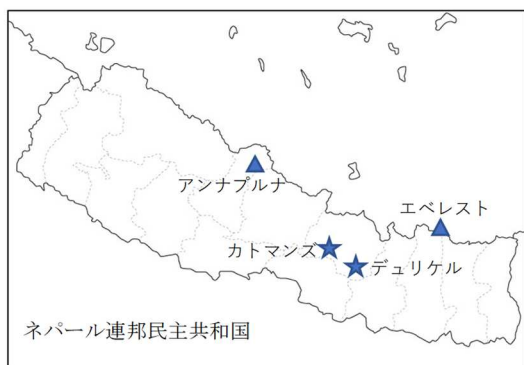
第20回～第28回（2009年～2017年）第20回から④スンドルバスティでの薬草の植え付けを開始、平行して第22回から⑤ゴサイクンダでの活動も加わった。

この間、1993年の政治闘争によるストライキを含む政情不安、2001年のビレンドラ国王一家暗殺に伴う政情不安、2008年の王制を廃止・連邦民主共和国への移行の影響、2015年の大地震と様々な試練に直面しましたが、現地の方々の支えにより1回も欠かすことなく活動を継続することが出来ました。またネパールでの活動をきっかけに1994年と2004年に元自由学園教師であった「安部道雄先生記念国際交流基金」奨学生としてネパールからの留学生が男子部中等科に入学し、それぞれ最高学部までの10年間の課程を卒業しました。



ネパールの民族衣装で記念撮影

また2016年度より最高学部では第2外国語の1つとしてネパール語が開講されています。



5. 新名栗フィールドでの植林活動

場所 埼玉県飯能市名栗地区 面積 19ヘクタール 将来の樹種 針広混交

2015年1月より埼玉県飯能市名栗地区にて、旧名栗村の最後の村長であった柏木正之氏（男子部19回生）の協力を得て、新たな育林・植林活動が始まりました。同年6月に柏木氏が代表理事をされている一般社団法人名栗すこやか村から名栗地区の中心を走る街道に面した4カ所の山（約19ヘクタール）を提供していただき、名栗すこやか村の進める針葉樹人工林からの針広混交林化による明るい里山景観づくりをめざす活動に協力をしていくことを定めた協定が締結されました。現在は最高学部の学生が年7回ほど樹林の手入れや土地の境界確定調査などを、終了した海山労働に引き続き行っています。今後は、まず間伐を進める

ことによって陽の光が林内に差し込み、豊かな植生になることを目指します。このような森は光が差し込まない森に比べ、土砂流出や地力低下が少なく、多様な生物が生息しやすいと考えられています。

また、新名栗フィールドでは、すこやか村が所有・管理する山林と畑地、古民家宿泊施設などを利用して、単に育林・植林だけではなく、地域の環境・景観改善や産業振興などを加え、地元とも連携した形の活動をするようになりました。そのため、男子だけではなく女子の活動も視野に入れられ、幼児生活団から最高学部までそれぞれの年代に合わせて全校規模で活用することが進められようとしています。



一の山 林内の道作り



樹木の成分分析の測定を行う女子学生



特産作物試作のために間伐材でシカ避けの柵を作る

	1950	1960	1970	1980	1990	2000	2010	2020	
名栗植林地									
海山植林地									
黒羽植林地									
ネパール ワークキャンプ									
新名栗フィールド									